若松での血脇先生の言葉「東京にきたら、たずねてきなさい」を、たよりに血脇先生をたずね、やっと高山歯科医学院の小使の職につくことができました。清作は、朝早くから働き、ひまをみて勉強しました。また、少ない収入から、月謝を払い、ドイツ語の勉強にも通いました。

こうして、六ヵ月も過ぎ、後期の試験がせまってきました。後期の試験を受けるには、済生学舎で勉強しなければなりません。しかし、月謝と下宿代で、月十五円もかかります。これも、血脇先生と相談して、学費を出してもらい、勉強を続けました。

後期試験には八十人の人が受験し、合格者は、たった四人でした。清作は、二十一歳でりっぱに医者になる資格を独力でとったのです。

血脇先生は、清作に家に帰り、医者の開業をすすめましたが、清作は帰りません。清作には、別の新しい目的が生まれていました。